

# 医学部ウォーカー

1面：就任のご挨拶  
2～3面：退職にあたって  
4面：新任教授紹介  
5～7面：特集 各賞受賞  
8面：第1回学術特別賞(遠藤賞)を受賞して  
9面：留学だより  
10面：渡り廊下完成・人事異動  
題字 前弘前大学長 遠藤正彦氏筆

## 医学研究科長就任にあたって

中路重之



平成二十四年二月一日から医学研究科長を拝命いたしました社会医学講座の中路(なかじ)重之と申します。

長崎県の諫早(いさはや)高校の出身で、昭和五十四年に弘前大学医学部を卒業しました。卒業後内科学第一講座(現在の消化器血液内科学講座、吉田豊教授)に入局し、大館総合病院、県立中央病院、むつ総合病院、浪岡町立病院、青森労災病院と大学との往復を繰り返しながら十年ほどお世話になりました。途中、公衆衛生学講座(白谷三郎教授)の大学院で博士号をいただき、平成元年に旧衛生学講座(菅原和夫教授)の助手として採用され、平成十六年に同講座の教授に推挙していただきました。その後、旧公衆衛生学講座と旧衛生学講座の統合により社会医学講座と名称変更となり現在に至っております。

私には、医学研究科、医学部、弘前大学の近い将来に貢献していこうという気持ちが大きくなってきました。今は、自分の特徴を出して全力を尽くしていこうと考えています。

私は、これまで評議員、予算施設委員、学務委員、学事委員の立場から佐藤敬研究科長(現学長)の仕事ぶりを拝見してきました。したがって、その職務の重大さ、大変さは理解しているつもりです。浅学非才の身ゆえ、より一層頑張らなくてはと自らに言い聞かせております。佐藤新学長も

座の三つの大きな活動である「岩木健康増進プロジェクト」「スポーツ医学」「がん登録」は各々その根元は同じで、常に地域社会を意識した活動であり、かつ互いが連携しています。このことは、色彩の違いはありこそすれ医学研究科のあり方そのものにも通じると考えています。「自分の特徴」を研究科長の仕事に活かしていきたいと考えています。

私なりに、医学研究科の現状の問題点や今後の進むべき道に対し意見を申し述べさせていただきます。この度、それについては、この医学部ウォーカーで徐々に書かせていただきたいと思います。

皆様には今後ともなにとぞよろしくお願い申し上げます。

## 学長就任にあたって

佐藤 敬



きたことを改めて噛みしめる必要を感じています。

学長選考過程でも訴えて来ましたが、大学は教育の場であり、私は教育の充実を常に意識していきたいと思っております。私は研究施設に所属してきたため、当初はほとんど研究に没頭できるという、今思えば研究者としては幸せな一時期を過ごすことができました。が、次第に教育活動の機会が増え、それはそれで大いに勉強になりました。教育を担当すること自体が重要な勉強の機会であり、また、できるだけ学生と自分自身で満足できる授業にするよう念じてきたつもりです。

平成二十四年二月一日をもって弘前大学学長に就任することになりました。昨年九月の選考会議において次期候補者に指名された時には、大変なこととは思っていましたが、もう少し先なものでじっくり考えていこうという思いもあつたような気がします。いよいよ秒読みに入った今、これまでに教職員の方々とお話しして

## 理事(教育担当)・副学長に就任して

中根明夫



このたび二月一日付けで、佐藤敬新学長のご指名で理事(教育担当)・副学長に任命され、責任の重さに心を締め付けております。私の仕事は入試、学部教育、大学院教育、就職まで、学生が弘前大学学生生活から出口までを担当します。私たち教員は得てして大学を研究センターの場と考

えがちです。教員は研究業績で評価されます。しかし、本来大学は「教育の場」であり、教育が大学の存続を左右するものであると考えています。志願者を増や

すことにより学生の選択肢を拡げ、入学した学生については教養教育、専門教育をしっかり修得させ、質の高い学生を社会に送り出すというのが私たち大学人の使命です。質の高い学生を養成し、社会で活躍することが、弘前大学のもっとも大きな広報効果をもたらす。弘前大学の発展に大きく貢献するものと考えています。

佐藤学長が打ち出された方針の第一は「教養教育の充実」です。具体的には、発足以来見直しがなされなかった二十一世紀教育体制の検証と抜本的な改革を行うことが学長の方針に答える最優先事項と考えています。二十一世紀教育体制は制度疲労を起し、さまざまな問題を抱えている状態である一方、この問題に着手することは、いわば「噴

とがあつてはならないと思います。学長に就任して考えるべきことは他にもたくさんありますが、今一度、教育の重要性を強調させていただきます。また、二十回以上におわたって私の意見を載せていただき、心から感謝申し上げます。今後も「医学部ウォーカー」が医学研究科の一体化を推進していく媒体として重要な役割を果たしていくものと期待します。最後に、医学研究科・医学部医学科のすべての学生、教職員に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

医学部での教育に携わる中で明確に意識したこと、教養教育の重要性です。もちろん医師は患者さんの期待する知識や技術を身につける必要がありますが、それだけでは不十分で、倫理観や患者さんとのコミュニケーション、医療チーム内での人間関係などの点でも優れていなければなりません。このことは医学だけでなく、すべての領域に言えることで、教養教育の重要性は全学的課題です。教養教育は無限の広さと深さを持っています。専門教育に進んでも、教養を身につける努力はいくらでもでき、また、そうした

火寸前の火口に手を突っ込む」という、極めて難問であるのは確かです。しかし、そろそろ傍観する時期は過ぎ去ったかと思えます。各大学の教育で共通しているのは教養教育です。従って、今後ますます教養教育の評価が、大学の評価のなかで重要になってくるものと思われま

学長が二つ目に掲げている「国際交流の促進」は研究・教育など幅広い内容を含んでいますが、直近の問題として留学生の増加策があります。いづれにせよ、教育のグローバル化を促進する一方、地域に密着した教育の促進、すなわち「教育のローカルイゼーション」を実践できるための教育改革が必要です。教育担当理事の就任時に学務部から提示された懸案事項は四十項目を超え、めまいを起すような気分になりました。また平成二十五年に弘前大学は、大学評価・学位授与機構による教育を中心とした評価を受審することが決定しています。懸案事項として極めて困難な問題が多く含まれていますが、いづれも重要事項ですので、粘り強くかつ迅速に、解決の糸口が見いだすことができるような仕事を心掛けたいと思います。また、佐藤新学長体制下、弘前大学を発展させていくためのさまざまな局面で、微力ながらその屋台骨を支えることができるように努力したいと思

表 1. 附属病院長就任後の出来事

年	内 容
18	附属病院長に就任。初の専任制。学長特別補佐を併任。
18	第 60 回国立大学病院長会議主催（弘前市）
19	7:1 看護体制スタート
19	附属病院新外来診療棟竣工
19	病棟ナースコールシステムの更新完了
20	ひろだい保育園新設
20/22	放射線部に PET-CT、3 テスラ MRI 導入、リニアック更新
22	NICU 及び GCU 改修工事竣工
22	高度救命救急センター竣工、屋上ヘリポート竣工
22	診療教授・准教授の制度施行
23	東日本大震災発生、福島原子力発電所事故発生
23	DMAT 出動、弘前大学被ばく状況調査チーム・医療支援チーム派遣
23	遠隔操作型手術支援ロボット（ダ・ヴィンチ）導入（北海道・東北で初）
23	初地下駐車場竣工（国立大学病院初）

この時のコンサルタンツ導入、院内では「診療報酬対策特別委員会」を立ち上げることにより奇跡的に財政難は回復しました。

この時のコンサルタンツ費用は学長裁量経費から出していたが、次の危機は七・一看護の波でした。これを達成するには医療系大学が増えはしたものの、平成十九年は多くの看護学生が大会に流れてい

一九七一年三月に東北大学医学部を卒業し、橋本虎六教授の薬理学教室の大学院に入れていただき、薬理人生がスタートした。以後四十一年間薬理学に関するは全く思っていない。大学院ではそれまでの勉強を克服せねばならなかったが、実験が面白くて仕方無かった。最後の弟子は何かと頑張っていて、今では臨床で常識になっている「ジヒドロピリジン系のCa拮抗薬ニフェジピンが治療量では房室結節伝導を抑制しな

い」ということを一九七四年に世界で最初に九ごとと生体位心で証明した一翼を担った。イヌ血液灌流房室結節標本で行った学位論文が Circulation Research に日本人著者だけで載るといふ歓喜がなかったら薬理を続けていたか分からない。先輩方が外国に留学するのを目の当たりにして、兔に角外国に行きたかった。七十五年三月に大学院を修了し、四月から平則夫教授の最初の弟子として薬理学第二講座の助手になり、三十

七年に及ぶ教員生活が始まった。一九七五年九月から西ドイツ・エッセン大学に留学し、二年二月月研究生活とフスバールを満喫した。帰国後またイヌ血液灌流房室結節標本に戻り、房室結節の自律神経支配の解析に没頭した。一九八一年四月から新設の山梨医科大学に橋本敬太郎教授の薬理学教室の助教として赴任した。山梨でも房室結節伝導の薬理学的解析やらCa拮抗薬の血管・組織選択性の解析を行うのが楽しく



十七年前の平成七年一月一日付けで当時の第三内科に着任し、あつという間か

やつとという感じは微妙な差であるが、とにかく老兵が消え去る時期が来た。丁度八戸はるか沖地震と阪神淡路大震災に始まり、東日本大震災で終わる巡り合わせとなった。今度数年後に八戸でまた震災に遭わなにか多少危惧するところもある。

着任当初考えたことは、

いわゆる三代目の難しさで『売り家と唐様で書く三代目』になってはいけない、ということだった。

そこで『一流の組織には固有の文化がある』といわれているので、できたら三内特有の文化を創りたいと考えた。いろいろと考えた末『三内の特徴は「考える（次ページへ続く）

昭和四十五年（一九七〇年）弘前大学医学部卒業以来、外病院の勤務を含めると実に四十二年の長きにわたり弘前大学医学部の皆様には公私ともにお世話になりました。私の母体となつて支えていただいた皮膚科教室での思い出は同門会誌「甲年会々報」に譲ることとし、ここでは病院長時代



藤正彦学長の胆入りで外部のコンサルタンツ導入、院内では「診療報酬対策特別委員会」を立ち上げることにより奇跡的に財政難は回復しました。

「埋蔵文化財」、後ろに「文化庁の史跡」があり、難問をクリアしなければなりません。更に三・一一の東日本大震災で資材不足に陥りました。よく出

来上がったものと、今更ながら安堵しています。三・一一の震災時、宮城県知事や文部科学省から医療支援チーム派遣の急な要請がありました。参加いただけました。医師、看護師を募集しましたが、通常の業務量も尋常でない所から、チーム編成は危ぶまれていました。しかし、うれしい奇跡が起きました。予定の人数を上廻る応募者があったのです。今月末、弘前大学医学部附属病院「東日本大震災医療

支援活動記録集」が発刊される運びとなりました（図1）。生の声から多くの教訓が得られます。

これまでご支援いただいた諸先生、事務方一人一人の顔を想い浮かべつつ、ハラハラながらも充実した日々を過ごさせていただき本当にありがとうございます。佐藤敬新学長、中路重之新医学研究科長、新病院長の元、附属病院の更なる発展を望んでやみません（二月末日記）。

の「ハラハラ」物語の一端を述べ、責務に代えさせていただきます。

附属病院長に就任したのは四月、あつという間の六年が過ぎました。この間の出来事は（表1）にまとめた如くです。まず驚いたのは、「法人化で潰れる病院が三つある」という噂でした。しかも、弘前大学もその中に入っていたのです。確かに、赤字財政は明らかでした。高額の償還費用に加えて二%の「経営改善係数」と称する負担を課せられてあえいでいました。遠

ました。砂田看護部長を中心に「お願い巡り」の毎日でした。一挙に採用ができれば加算はもろえず人件費のみが増えます。もしもに備えて法人本部の財務にお願いました。締め切り一週間前で集まらず焦りましたが、間に達成することができました。これも奇跡的な出来事でした。附属病院前の環境は一変しました。しかし、地下駐車場建設にあたっては、前に

# 退職にあたってー私のヒヤリハットー

附属病院長 花田 勝美

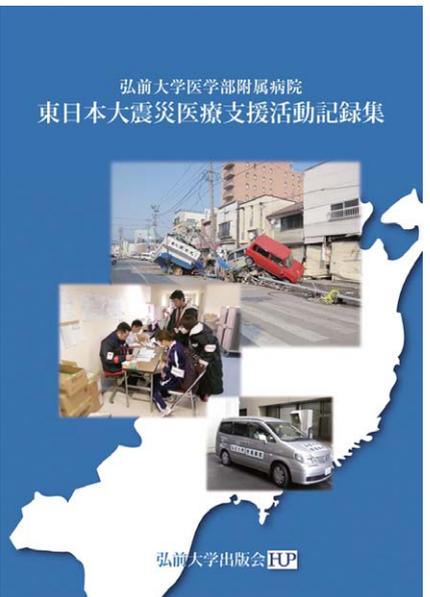


図 1. 東日本大震災医療支援活動記録集



第82回日本薬理学会年会 in横浜, 2009・3・17  
右から、2007年ノーベル生理学・医学賞受賞 Oliver Smithies 教授、第82回日本薬理学会年会長 元村 成弘前大学教授、第2回薬理学会江橋賞受賞 山中伸弥京都大学教授

が今弘前大学の循環器分野の中心で活躍しているのが殊の外嬉しい。とうとうその日がやってきて研究のパラダイムシフトを余儀なくされた。整形外科の原田征行教授に「先生の専門はCa拮抗薬とか、Caといつたら骨（コツ）ですよ、一緒に仕事しましょう！」と声を掛けていただき、脊柱後縦靭帯骨化症（OPLL）の研究が始まった。研究面でブレイクスルーすることができ、OPLLが教室の研究のメインテーマになった。指揮を執つてく

て仕方なかった。この間イヌ血液灌流心筋標本を武器に、アラバマ大学、エッセン大学、ミネソタ大学に仕事請負人よろしくサバティカルと称して遊学し、英気を養った。感謝！

一九九四年四月に弘前大学に教授として赴任し、薬理人生の集大成の十八年が過ぎた。弘前大学でもイヌ血液灌流心筋標本にこだわりの循環器内科の奥村謙教授の教室の若い先生達と実験した。心臓血管外科の先生達も加わり多数の有能な人材と研究が出来た。彼ら

今、大学を離れるにあたり、一番寂しいのが若い学生諸君と接する機会が少なくなることです。近くにいます、声を掛けてください。感謝！

授です。異所性骨化の研究は間葉系幹細胞まで到達した。感謝！

二〇〇九年三月に第八十二回日本薬理学会年会の会長を務めた。Plenary Lecture（二〇〇七年ノーベル生理学・医学賞受賞の Oliver Smithies 教授をお招きし、弘前大学でも講演して頂きました（医学部ウォーカー第四十九号参照）。横浜での講演では、薬理学会江橋賞受賞のあの iPS 細胞の山中伸弥教授との連続講演となり、メイホールが満員で多数の立ち見が出る大盛況でした。Smithies 教授の言を受けて山中教授が講演を英語に切り換えるというサプライズに流石とうなりました。二人の超大物に挟まれた年會長の写真をご披露します。薬理人生の宝物の一つです。感謝！

# 退職にあたって

内分泌代謝内科学講座 須田 俊宏



着任し、あつという間か

やつとという感じは微妙な差であるが、とにかく老兵が消え去る時期が来た。丁度八戸はるか沖地震と阪神淡路大震災に始まり、東日本大震災で終わる巡り合わせとなった。今度数年後に八戸でまた震災に遭わなにか多少危惧するところもある。

着任当初考えたことは、

いわゆる三代目の難しさで『売り家と唐様で書く三代目』になってはいけない、ということだった。

そこで『一流の組織には固有の文化がある』といわれているので、できたら三内特有の文化を創りたいと考えた。いろいろと考えた末『三内の特徴は「考える（次ページへ続く）

(前ページより)

内科」であり、明るくアカデミックな雰囲気の中で、「なぜ、どうしてそうなるのか」という病態のメカニズムを常に考える文化」がいかにも三内らしく、それを確立できたかと考え実行してきたつもりであるが、客観的にどうかは皆さんの評価にお任せしたい。

医療は診療、研究、教育が三位一体となって遂行されるものであるが、人にはそれぞれ適性がある。そこで三位一体の中味に濃淡や凹凸はあっても、それぞれの専門分野において全国に通用する医師を育成することを目標とし、教室員に対

して研鑽を求めた。

また私個人に課した義務および目標としては、①内分沁学会学術集会を開催すること。②ライフワークであるクッシング病の日本における診断基準を作る。③内分沁代謝学の教科書を上梓すること、とした。個人的な義務と目標は何かと達成できた。またおこがましいかもしれないが、現在の教室の診療レベルは間違いなく全国のトップレベルになっているものと感じている。

これからの若い人達には、市中病院の院長で大病院における教育、診療を行うのではなく、大病院

では研究に裏付けされた、より高いレベルでの教育と診療が求められていることを自覚して、研鑽してほしいと願っている。さらに今後教育、診療または研究の面で、自分がその専門分野において全国区かどうかを常に自分自身に問うことが大事である。

何はともあれ集中力と持続力、さらには記憶力の衰えは、どうしようもない現実として現れてくる。老害にならないよう、いい潮時を見つけて「足るを知る」こともまた大事なことだと実感している。それでは皆さん、お元気で。

# 弘前での体験

神経精神医学講座

兼子直



約四十年間弘前を拠点に教育、研究、診療活動をしてまいりました。精神神経学領域における臨床薬理学研究から開始し、二十数年前に日本臨床精神神経薬理学会を立ち上げました(このとき、小生は助教でし

た)。この領域では山形大学の近藤教授が誕生しました。この学会の立ち上げから参加した仲間から多数の精神科教授が生まれ、活躍中です。抗てんかん薬の基礎研究では現在三重大学の岡田

教授が学生時代から研究に参加し、教室の研究水準を高めてくれました。二十数年前に及産婦人科、小児科との共同研究「てんかんと妊娠」では小川先生(現、むつ病院院長)と夜中まで研究を続けたことを記憶しています。この研究の結果は最近追認され、国際抗てんかん連盟や日本てんかん学会のガイドラインに大きく採用されており、共同研究者一同の誇りになっております。

てんかん研究の中では多数の責任遺伝子同定から生まれたモデル動物としての三基準を満たしたヒトてんかんモデル動物の作出(特許獲得、市販中)とてんかんの遺伝子診断チップの開発(特許獲得、高度医療申請準備中)は大学への置き

土産になるのではないかと、思います。その他、日本てんかん学会の国際化への対応、国内外の研究者との共同研究展開、日本学術振興会、大学評価機構等への協力を含めた様々な体験の機会がありました。多忙でしたが、良い経験となりました。

この四十年間で得た最良の宝はやはり国内外の素晴らしい同僚、友人、共同研究者を得たことであると今感じています。臨床では病院の従来の診療領域に加え、児童思春期精神医学、リエゾン精神医学を立ち上げ、医療水準の向上に貢献できたと思います。また、長期・短期留学生を含む多くの国内外の優秀な大学院生の育成に参加してきましたが、これら院生の中から国内外の医学部教授だけで

# 定年退職を迎えて

昔と今のアーリーイクスposureジャーナル

医学医療情報学講座 羽田隆吉



私は昭和四十三年に弘前

大学医学部(進学課程)に入学しました。入学当時、本町団地の附属病院は現在の一世代前の建物で、その周りの道は春先のためかとても泥っぽかったことが記憶に残っています。そのころ、医学部進学課程一年、二年生は文京キャンパスで教養の授業を受ける生徒、専門課程一年から四年生は本町キャンパスで医学の講義を受ける学生という相当明確な意識区分があり、実際、医学科教授の中には、「一、二年生はプレス

チューデント、三から六年生がスチューデントだ!」と明言する先生もおられました。このようなこともあり、一年生から六年生までの縦の繋がりはもっぱら運動系・文科系のクラブ活動によるものであったと記憶しています。クラブ活動を共にする一、二年生にはラテン語で骨の名前を呼ぶ三年生(専門課程一年生)が本場に格好良く見えたものでした。また現在の Early Exposure(早期臨床体験実習)が入学後早期から見学を中心に医療現場を体験するものであるのに対し、昔の Early Exposure は一般(世間)社会学を対象としていて、冗談ではありませんが、実習の場は「鍛冶町」指導教官はクラブ活動の上級生かクラス仲間

のです。佐藤先生からは「学問は北から」と教えを受けたことが今でも鮮明な記憶として残っています。教室の研究に対する姿勢の中で根幹をなすものは学問に対する真摯な態度、結果ではなくプロセス(努力)を評価することであったと感じています。

さて、四月から八戸においては、北東北でてんかんセンターを立ち上げます。これまでの研究の蓄積を活用し、新たな環境で診療・教育に携わる予定です。地域へ、学会への貢献を続ける決意をしています。

二〇一一年十二月三十一日を持ちまして弘前大学大学院医学研究科を辞し、母校の新潟大学に異動致しました。四年間大変充実して日々を過ごすことができました。ありがとうございます。二〇〇八年一月新設されました腫瘍内科学講座担任として東北大学から赴任し、それまでの肺腫瘍と研究が主だった業務から、腫瘍全般を診療する業務へと大きく変わりました。四年間何とかやってこれたのも、スタッフが私を支えてくれたことや、周囲の方々の協力のおかげです。深く感謝申し上げます。

# 津軽での4年間を振り返って

(前)弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座 (現)新潟大学大学院医歯学総合研究科腫瘍学分野



を揃えて言うほどです。医学科が弛まず前進してきたことの証の一つであると思えます。平成二十四年の正月(医学部互礼会の折り)、本町団地の医学科並びに附属病院の再開発はひとまず区切りを迎えたとの話がありました。本町に本町団地は立派になりました。立派になった本年の三月、私は弘前大学を円満定年退職します。

弘前大学医学部(進学課程)に入学して以来四十四年間、何の不自由なく勉強させていただきました。多くの人々から過分な援助と励ましをいただき、有意義な年月であったと深く感謝しています。これに対し、医学部にいかばかりかの貢献でもできたかとなると甚だ疑わしいところですが、私としては比較的眞面目にそれなりの努力をしたつもりですので、お許しください。最後に医学研究科・医学科のますますの発展をお祈り申し上げます。本場に長い間、有難うございました。

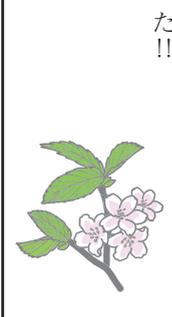
西條 康夫

腫瘍内科を担当し、まず感じたことは、多くの患者さんや医療スタッフが腫瘍内科医を求めているという事実でした。このような期待を背に、少ないスタッフ数ではありましたが、臓器別診療を超えて、がん薬物療法を実践して参りました。また、診療の性格上、多くの他科の先生方や医療スタッフから多大な協力を頂くと共に、多くのことを学ぶことができました。

一方、地方国立大学の宿命というべき問題にも直面しました。少ないポスト数や予算もありますが、なんといたっても最大の問題は医学部卒業生が大学に戻って来ないというものでした。この問題は、少しずつ緩和されておりますが、単に医師偏在だけの問題ではなく、中央と地方の格差という大きな問題が横たわっておりますので、今後も解決すべ

き課題と考えられます。さて私生活では、四年間を通して津軽の美しいお酒をよく頂きました(笑)。また、最初の二年間は市民農園を借りて野菜栽培、後半二年間はランニングと、津軽での生活をそれなりに満喫させて頂きました。腫瘍内科はまた新しい教授・科長を迎えて、今後発展することが期待されます。今後ともご支援を賜りますようお願いいたします。

最後に、私西條を暖かく迎え、一人前の腫瘍内科医(まだ半人前?)に育ててくれた、弘前大学大学院医学研究科および弘前大学医学部附属病院関係者の皆様に深謝申し上げます。ありがとうございます!!



# 最終講義が開催される

学務委員長 若林孝一  
(脳神経病理学講座 教授)

平成二十四年二月十日に基礎大講堂で最終講義が開催されました。今回は、三月末で定年を迎える四人の教授(元村成教授、須田俊宏教授、兼子直教授、羽田隆吉教授)に加え、同じく三月末で任期満了となる花田勝美病院長、二月に学長に就任された佐藤敬先生の六人が講義を行うという豪華な顔ぶれとなりました。最初に中路研究科長からご挨拶があり、その後の司会進行は学務委員長が務めました。



年」というテーマで講演をなさいました。皮膚の金属アレルギーの防御や治療に関するお話の後、附属病院長としての六年間の実績について紹介されました。最後に山極勝三郎の「行きつけば また新しき 里の見え」という句を紹介されたのが印象的でした。病態薬理学講座の元村教授のテーマは「房室結節、OPLI、そして感謝」でした。先生の研究にとって欠くことのできなかった人達の紹介を含め、弘前での十八年に及ぶ研究生生活を振り返る内容でした。学生との真剣勝負が楽しかったという先生の思いが伝わる最終講義でした。

平成二十一年から十八年三月まで皮膚科学講座の教授を務められた花田先生は「光に魅せられて20

をうかがわせる内容の講義でした。研究はおもしろい、という言葉が印象に残りました。神経精神医学講座の兼子教授は「学問は北から」と題し、主として「てんかん」に関する臨床面と研究面での講義をされました。研究面でも第一線で活躍してこられた兼子先生ですが、結果よりもプロセスを評価したい、という言葉が心に残りました。

脳血管障害に関するご自身の研究活動に加え、日本脳卒中学会の設立には本学関係者が深く関与していたことを力説されました。また、最後には弘前大学全体の研究に関するアクティビティーの指標を示されました。各先生の講義終了後には花束の贈呈があり、大きな拍手が送られました。

脳血管病態学講座の佐藤教授(現学長)は「37年間の研究を振り返って」と題し、お話をされました。脳血管障害に関するご自身の研究活動に加え、日本脳卒中学会の設立には本学関係者が深く関与していたことを力説されました。また、最後には弘前大学全体の研究に関するアクティビティーの指標を示されました。



二〇一一年十一月十六日に臨床検査医学講座教授に就任いたしました。前教授の保嶋実先生はじめ、歴代の教授が築いてこられた教室であり、まさに身の引き締まる思いであります。また、講座とやらんで検査部の大所帯、さらに感染制御センターの業務も仰せつかり、様々な皆様から着任時のオリエンテーションを受けている毎日です。大学人の三大任務である診療、教育、研究について思うところを述べてみたいと思っております。

## 新任の萱場です。

### 宜しくお願ひします。

臨床検査医学講座 教授 萱場 広之

フォールについて実践的知識を重視していきたいと思っております。系統講義はどうしても学生が受け身となるので、一通り講義したあとは、実際の症例を中心に学生参加型・討論型の講義形式を取り入れる予定です。また、本学保健学科では検査技師を目指す若人が多く学んでおります。検査部では連日多くの学生が実習に訪れており、一線の検査技師から指導を受けています。検査スペースが検査技師を目指す若い学生であふれている様子は壮観です。

検査技師自身も学生教育に携わることで知識を新たにしたい、知識、精神的に磨かれている様子が伝わってきました。検査技師スタッフからは社会人大学院制度を利用して、研究者としての資質を磨こうとする者も少なくなく、教育研究施設である本院ならではのスタッフの質の高さに感銘を受けております。優秀なスタッフに伝えるだけの職場、研究・教育の場を提供していかなくてはと感じております。診療面では診療支援部門として、病院機能の向上をはかるとともに、努力しなくてはなりません。本院では診療科とのコミュニケーションを保つラインが確保されており、いろいろな要望が来ております。全ての要望にお応えできない場合もあるのですが、現場スタッフはやはり無理と思われざるを得ない、何とかお応えするよう、知恵を絞っております。一旦、現状では対応困難としてお返事したもので、将来的にご要望に応える方策はないかと繰り返し検討しておりますので、ご理解を頂きたいと思っております。臨床検査医学講座、検査部は研究支援の場、共同研究の場でもあります。今後、体制を整えながら院内外からのお声掛けを待っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

## 新任の挨拶

形成外科学講座 教授 漆 館 聡 志



平成二十四年一月一日付で弘前大学大学院医学研究科形成外科学講座を担当することとなりました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。私は青森県三戸町の生まれで、八戸高等学校卒業後、弘前大学に入学し平成七年に卒業いたしました。

学生時代にはラグビー部に所属し精円を追いかける日々でした。学生時代にラグビー部を通じてたくさん仲間を得たことが大きな財産であったと感じております。

私と形成外科との出会いですが、私が学生の頃、弘前大学形成外科は附属病院の診療科のみであり大学の講義はありませんでした。そのため四年生までは形成外科がどのような診療科かほとんど知りませんでした。そんな私も五年生となり、臨床実習が始まりました。聴診器を買い、わくわくしながら初めて耳に当

てみたときに、私は愕然としました。高校で柔道をしてきた私の耳は耳介血腫後の変形、いわゆるレスラー耳のため聴診器が入らなかつたのです。そこで私はラグビー部の先輩であった形成外科の四ッ柳先生を訪ね、聴診器が入るように耳介形成術を施行していただいたのです。これが私と形成外科との出会いでした。その後臨床実習で形成外科をまわりその魅力に取り付かれました。もともと外科系の希望でしたが、創る外科、特に四ッ柳先生の専門であった小耳症の手術には感動を覚えました。無

いものを創る外科はもともとと工作や模型が好きだった私には非常に魅力的に映りました。かくして私は形成外科医の道を選択しました。形成外科は特定の臓器が対象ではなく頭のてっぺんからつま先まで体表がすべて対象となるため、非常に様々な疾患が存在します。また治療法も多種多様で非常にバラエティに富んでおり、形成外科手術は定型的な術式が少ないのが特徴です。このため症例ごとに術式を計画していく必要がありますし、術中に臨機応変に変更していくことも必要です。この点が形成外科の難しい点でもあります。逆に顔面組織欠損に対する局所皮弁による顔面再建をライフワークの一つとしておりますが、このような治療が成功し、顔面再建後の患者様がマスクなどを付けずに外れを受診したときには非常にうれしく感じます。今後もこのような患者様の満足が得られるような診療を行っていきたくと考えています。

# 平成23年度 弘前大学学生表彰

教育委員会 鬼島 宏 (病理生命科学講座 教授)

平成二十四年二月二十日、平成二十三年度弘前大学学生表彰式が、文京地区の大学本部にて開催された。弘前大学学生表彰は、当該年度ないしその前年度に課外活動・研究活動・社会活動等で顕著な成果を挙げた学生または団体が表彰されるに値するものが、全学の教育・学生委員会で審議・選出されて、学長より表彰される制度である。今年度は医学科・医学研究科からは、以下の七個人・団体が栄誉ある表彰を受けた。

**木村相泰 (三年)**  
日本病理学会学生示説優秀賞受賞

**大原悠紀 (六年)**  
日本病理学会研究発表・論文公刊

**追切裕江 (六年)**  
日本病理学会研究発表・論文公刊

**呉 雲燕 (大学院三年)**  
日本病理学会カンファレンス研究奨励賞受賞



**高林杏奈 (三年)**  
第五十四回東医水泳バタフライ優勝・個人メドレー優勝

**医学部サッカー部**  
第五十四回東日本国公立医学部サッカー大会優勝

**医学部バドミントン部**  
第四十一回北医体バドミントン女子団体優勝・男子団体準優勝、第五十四回東医体バドミントン女子団体優勝

弘前大学医学部では、国家試験合格率のみならず、共用試験結果や臨床研修における卒業生の活躍などで、全国的にも教育レベルが高い評価を受けるようになってきている。加えて、今回の学生表彰者をはじめとして課外活動等の分野でも活躍してくれる学生が多いのは、頼もしい限りである。今年度の学生表彰数は、奇しくも昨年度と同様の七個人・団体となった。しかし、数年前までは零であった研究活動において顕著な成果を挙げた学部学生が、一昨年度は二名、昨年度・今年度共に三名と着実に表彰対象となっている。これも医学科三年次後期には研究室研修のキャリアプログラムもあり、在学中から研究に触れる機会があり、その成果のひとつの表れであると理解したい。一方、課外活動(クラブ活動)は全般に盛んであり、バドミントン部・サッカー部・ラグビー部をはじめとして各部活動がここ数年東医体等で好成績を続けているのは賞賛に値する。

今後、学生諸君が弘前大学医学部医学科で文武両道を実践するとともに、より一層充実した大学生活を送ることを期待している。

特 集

## 第16回 医学部学術賞

## 第14回 医学部附属病院診療奨励賞

## 第30回 唐牛記念医学研究基金助成金

このたび『悪性グリオーマ治療成績向上のための多角的治療戦略の構築について』というテーマにおいて、第十六回弘前大学医学部学術賞特別賞を受賞させて頂きました。大変名誉ある賞にて身に余る光栄であります。選考委員の先生方、医学部懇話会、青森県医学振興会、他大勢の関係者皆様に感謝申し上げます。また当日の受賞講演と授賞式には大勢の諸先生方、コメディカルスタッフの皆様にご参加いただきありがとうございました。

簡単に私の研究内容を紹介させて頂きます。私は日々の臨床と学生教育の傍ら一貫して脳腫瘍の研究をさせて頂いております。特に悪性グリオーマは五生率10%未満と極めて悪性で変化がなく、本疾患の治療成績を向上させることは脳神経外科の分野において最重要課題の一つであります。悪性グリオーマも他の癌腫と同様集学的治療が必須です。したがって手術、放射線、化学療法の開発を進めるだけではなく、様々な予後不良因子を解析し多角的な治療戦略を構築することが重要です。悪性グリオーマは術前診断が難しく、浸潤や髄液播種を来しやすく、腫瘍幹細胞の動態

特別賞

第16回 弘前大学医学部学術賞

悪性グリオーマ治療成績向上のための多角的治療戦略の構築について

脳神経外科 講師 浅野 研一郎

弱が臨床症状に変化を及ぼすことに気づきました。逆にN-カドヘリン遺伝子を導入することで、腫瘍の浸潤と髄液播種を防止することに成功し、その遺伝子導入効率の低さを改良する目的で、EGFRチロシンキナーゼ阻害薬の一つに間接的N-カドヘリン増強作用があることを証明しました。また腫瘍幹細胞と髄液播種に関する研究を進め、未だ解明されていない腫瘍幹細胞の動態を解明する試みを行っております。また臨床症例として、特に高齢者脳腫瘍手術における術後全身合併症の予防を目的としてリスタクファクターの検討と新しい画像診断手法の導入など、外堀を埋めるように研究を進めてきた成果であります。

最後に、本賞の受賞は個人のみで進められたわけではありません。当教室大熊洋揮教授、鈴木重晴名誉教授の御指導のもとに行われ、現在も継続して実践させて頂いております。また他院外の多くの先生方のご支援を受け進めさせて頂いており、何より当教室の先生方の協力があってこそ成り立つ研究であります。この場を借りて厚く御礼申し上げます。本賞の過去の受賞者の先生方を拝見すると錚々たる先生方が名を連ねております。その名譽を汚さぬよう、そしてこの弘前大学のために日々研鑽に励む所存であります。

この度はありがとうございました。

この度は伝統ある第十六回弘前大学医学部学術特別賞を賜り、選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。私はここ十年ほど、神経変性の研究にたずさわってまいりました。神経変性疾患にはそれぞれ疾患特異的な構造物が細胞内外に認められます。顕微鏡をのぞいて、これらの構造物を色鉛筆でスケッチされたご記憶をお持ちの方も多いと思います。実際、これらの構造物の有無、量や種類により疾患の確定診断に用いられます。一方、これらの構造物は、病態の解明につながる鍵として注目されています。つまり、構造物の生成機序が明らかになれば病態解明にもつながるだろうということになります。実際に家族性で伝わる神経変性疾患の原因遺伝子が同定され、そのタンパク質を過剰に発現させることにより、構造物が生成されることがあります。その中にはアルツハイマー病のアミロイドβ、パーキンソン病のαシヌクレインタンパク質などがあり、病態解明または治療のためにこれらの遺伝子改変動物が広く利用されています。逆に、あるタンパク質を発現しないようにした動物において異常な構造物が神経細胞内に生成される場合があります。プロテアソーム系やオートファジーといった細胞内の分解機能を担っているタンパク質群の一部を欠損させたマウスでは、神経細胞内に異常な構造物ができ、その後、神経変性から運動機能の低下、そして死に至ることが明らかになってきました。我々がこれまで異常構造物の構成成分として見出してきた分子は、いずれも「細胞内の分解経路」に関与しています。引き続き本研究を継続し、治療や早期診断に結びつくように発展させていきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。なお本研究は若林孝一教授をはじめ脳神経病理学講座の諸兄弟のご指導、ご支援の上に行われました。また、本研究は本学脳血管病態学(次ページへ続く)

特別賞

### 神経変性疾患における異常タンパク質の凝集機序の解明

脳神経病理学講座 助教 丹治 邦和

(前ページより)  
講座、分子生体防御学講座、新潟大学脳研究所病理学分野、脳疾患標本資源解析学分野およびジョージア

医科大学分子シヤペロンセンターとの共同研究です。この場をお借りして深謝いたします。

奨励賞

### Sustained repression and translocation of Ntcp and expression of Mrp4 for cholestasis after rat 90% partial hepatectomy

青森市民病院 (消化器外科講座) 三浦 卓也

この度は、名誉ある弘前大学医学部学術奨励賞に選考して頂き、大変光栄な次第です。選考委員の先生方、ご指導いただいた消化器外科、ゲノム生化学講座の先生方はもちろん、ご指導、ご支援、ご声援をいただいた様々な方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本賞は「ラット九〇％肝切除後胆汁鬱滞は Ntcp の持続する発現抑制と局在変化および Mrp4 の発現亢進による」という論文に対していただいたものです。本研究は、大量肝切除後の胆汁うっ滞が、類洞側胆汁酸取り込みタンパク質 Ntcp の発現が低下するとともに類洞側膜から消失することにより血液から肝への胆汁酸の取り込みが低下すること、類洞側胆汁酸排泄膜タンパク質 Mrp4 の発現が上昇することにより肝から血液への胆汁酸の排泄が増加することを明らかにしました。大量肝切除後、肝再生が急激に起こることから、Ntcp の分解による肝への胆汁酸取り込み低下は、細胞毒性を



医学部学術賞受賞者  
左から丹治先生、三浦先生、浅野先生、鈴木先生

奨励賞

### 医学部学術賞 (学術奨励賞) を受賞して

三沢市立三沢病院 (消化器血液内科学講座) 鈴木 一広

この度は学術奨励賞という栄えある賞を頂き、大変嬉しく思っております。これまでご指導頂きました福田眞作教授、西條康夫教授をはじめ、研究に携わって頂いた多くの先生方に心より感謝申し上げます。

この度受賞させて頂いた論文は「Mesenchymal Stromal Cells Promote Tumor Growth through」とともに初心者の状態から論文受理まで、約二年半にわたり濃密な研究期間を過ごさせて頂きました。この経験を生かしながら、この受賞を励みに今後この分野の発展に貢献していきたいと思っております。

この度は、附属病院診療奨励賞診療技術賞を受賞させて頂き誠にありがとうございます。グループを代表して関係者の方々に心よりお礼申し上げます。今回の受賞主題は、「ベッドサイド細胞診断による患者負担の軽減」というものです。当病棟では年間約七、三〇〇件、標本枚数にして約一五、〇〇〇枚の細胞検査を扱っておりますが、特に乳腺・甲状腺領域の穿刺吸引細胞診における細胞診断の精度向上と患者負担の軽減を計るべく、ベッドサイド細胞診を導入致しました。これは細胞診



を専門とする細胞検査士が外来など細胞採取現場におもむき、医師の補助を行うとともに、採取された検体を迅速・適切に処理し標本作製を現場で行うものです。このことにより標本の状態を的確に判断することができ、更なる穿刺が必要か終了可能かを判断して医師に伝えます。導入前は

診療奨励賞を受賞して

診療奨励賞

### 第14回 医学部附属病院診療奨励賞 ベッドサイド細胞診断の精度向上と患者負担の軽減

附属病院病理部 受賞グループ代表 刀 稱 亀代志

不適正標本が約十四％程度存在しており、それが細胞診再検査へつながり、患者さんへ肉体的苦痛や不安を強いることになっておりました。導入後は不適正標本が0％になるなど大きな改善が見られ、患者負担軽減に十分な効果があったと考えます。最後になりましたが、この精度の高い細胞診断を今後益々発展させ、患者さんにとってさらに利益あるものにするべく、病理部職員一丸となって仕事に励んで参りたいと思っております。今後ともご支援、ご指導のほど何卒よろしくお願い致します。



てんかん治療の主役は、抗てんかん薬なのですが、これには多くの種類があります。現在までのところ、どの薬がどのようなたんかん発作に有効なのかということはある程度分かっているのですが、実際に患者様を治療する際には、なかなか教科書どおりにはいかず、試行錯誤で薬物投与を繰り返して、患者様にあった

診療奨励賞

### 診療奨励賞を受賞して

神経精神医学講座 助教 菊地 隆

薬を見出す必要があります。しかし、このように何種類もの薬を試すのは、患者様の体に負担をかけることにもなりますので、できるだけ迅速に患者様にあつた薬を見つけることがとても大切になります。

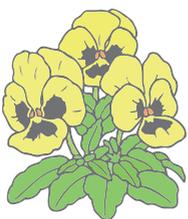
らんかんなのかを診断でき、ひいてはいち早く最適な薬を選択することが可能となります。今回開発しましたDNAチップを用いたSCN1A (ナトリウムイオンチャンネルの一種) に変異を持つ乳児重症ミオクロニーてんかん罹患者の患者様のDNAサンプルを解析した結果、比較的高い精度で遺伝子変異を判定できることが確認され、臨床応用可能な性能であることが示され、将来的にてんかん診断およびその薬物選択に役立てることが期待しております。

心のふれあい賞

### 小児科病棟における成長発達を促す遊びの提供

一病棟3階 松田 和子

この度、医学部附属病院診療奨励賞(心のふれあい賞)をいただきましたことは、誠に名誉なことであり、推薦いただきました看護部長はじめ関係者の皆様にご挨拶を申し上げます。子どもは「遊び」を通して、身体機能が発達し、五感が磨かれ、社会性や倫理観を身に付けていきます。また、入院という非日常的な状態においては、治療などから来るストレスを軽減することが出来ます。この活動は、スタッフが企画し、小児科の医師や学生、院内学級の先生方の協力も得ながら、主に四季の行事を取り入れてきました。二〇〇一年からは保育士が採用され、専門的立場から



助成金 A

第30回 唐牛記念医学研究基金助成金

画期的Aβ重合体特異的  
ワクチン療法の開発

脳神経内科学講座 准教授 松原悦朗



このたびは第三十回唐牛記念医学研究基金助成金Aを賜り、心よりお礼申し上げます。

開発に携わって参りました。アルツハイマー病は、立体構造変化が惹起されたAmyloid β (Aβ) 蛋白質の重合体が、患者脳の細胞外と蓄積する。立体構造異常分子の蓄積病と考えられております。私は、このAβ重合体が記憶障害の発症分子基盤であるとの作業仮説のもと、その特異的抗体を作製することで、発症病態解明と根本的治療開発を開始しました。幸いにも前臨床試験レベルで、アルツハイマー病モデルマウス脳内でその特異的制御を行った結果、確かにAβ重合体



助成金 A

唐牛記念医学研究基金  
(助成金A) を受賞して

分子病態病理学講座 講師 水上浩哉



この度は、第三十回唐牛記念医学研究基金(助成金A)を賜り、まことにありがとうございます。選考委員の先生方を始め関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。また、今まで研究の指導をしてくださいました分子病態病理学講座の八木橋操六教授、研究に協力してくださいました教室

が記憶障害発症分子基盤分子であり、我々の開発した抗体療法でアルツハイマー病の治療・予防が可能であることを実証することができました。現在ヒト臨床治療に向けた準備が急ピッチで進んでいる段階ですが、抗体療法はあくまで根本的治療法であり、こと予防的側面からは高価でその使用は非現実的である弱点を有しております。今回の研究助成金では、この取得抗体を基盤としてより安価である画期的なAβ重合体ワクチンを作製し、アルツハイマー病の根本的予防法確立を図りたいと考えております。今後、希望に満ちた長寿社会を達成するためにも本研究に邁進する所存です。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

の方々及び共同研究者の皆様には厚く御礼申し上げます。私は第二十三回唐牛記念医学研究基金で助成金Bをいただいております。その時Aの基金を受賞していた先生方は学内でも有名な方で、七年後に自分が同じ立場になるとは全く予想しておらず、驚くと同時に我が身の引き締まる思いです。専門に研究している日本でもめずらしい(おそらく唯一の)病理学講座です。病理的背景を基に糖尿病を研究し、その本質をつかみ、新規治療法を確立することを目的として日々の研究を行っております。現在本邦において二型糖尿病は爆発的に増加しており社会的、医療経済的に大きな問題となっております。二型糖尿病の原因の一つに膵β細胞容量の減少があり、その根治的治療の確立のためにはβ細胞容量の回復、増加は不可欠です。今回の私の研究テーマは、ヒト膵組織を用いてマイクロロダイゼクションで膵島組織をβ細胞で採取し、糖尿病状態におけるメチル化亢進などのDNAのエピジェネティック変化を検討するというものです。現在β細胞の脱落機序としては高血糖による酸化ストレスの亢進など代謝的機序が想定されております。しかしながら、ヒト組織を用いたDNAのエピジェネティック変化とβ細胞脱落を関連させた検討

助成金 B

CD34陽性細胞のペルオキシソーム増殖剤によるラット肝発がんにおける役割の解析

ゲノム生化学講座 講師 清水武史



唐牛記念医学研究基金  
(助成金B) を受賞して

この度は第三十回唐牛記念医学研究基金助成金Bを賜り、心より感謝申し上げます。私はこれまで、グルタチオンS-トランスフェラーゼM1遺伝子型がKS型のラットでは、ペルオキシソーム増殖剤(P)投与によって二頭酵素(BE)陰性の肝前がん病変が出現するのに対し、同遺伝子型がNC型のラットでは出現しないことを報告いたしました。また、KS型ではPP投与により類洞内皮細胞のマーカーである、ヒト膵島の入手の困難さからほとんど行われておらず、新しいβ細胞脱落機序の解明、更に治療法の確立につながるものと期待しております。今回いただいた研究費を有効に活用し、弘前大学からできる限り多くの報告を世界に発信できるように研究をすすめていきたいと思っております。

この度は第三十回唐牛記念医学研究基金助成金Bを賜り、心より感謝申し上げます。私はこれまで、グルタチオンS-トランスフェラーゼM1遺伝子型がKS型のラットでは、ペルオキシソーム増殖剤(P)投与によって二頭酵素(BE)陰性の肝前がん病変が出現するのに対し、同遺伝子型がNC型のラットでは出現しないことを報告いたしました。また、KS型ではPP投与により類洞内皮細胞のマーカーである、ヒト膵島の入手の困難さからほとんど行われておらず、新しいβ細胞脱落機序の解明、更に治療法の確立につながるものと期待しております。今回いただいた研究費を有効に活用し、弘前大学からできる限り多くの報告を世界に発信できるように研究をすすめていきたいと思っております。

PBLシナリオ賞

脳神経生理学講座 教授 上野伸哉

CD34陽性の肝細胞様細胞(以下CD34陽性細胞)が出現するのに対し、NC型では出現しないことを見出しました。KS型におけるCD34陽性細胞とBE陰性巢の出現時期は一致しており、両者はPPによる肝

発がん過程で重要な役割を持つと示唆されます。そこで、①CD34陽性細胞は肝前駆細胞由来かあるいは骨髄細胞由来か、②CD34陽性細胞がBE陰性巢になるか、この二点の解明を本研究の目的といたします。医薬品や工業用品などに広く用いられるPPは齧歯類に肝がんを誘発することが知られていますが、発がん機構は不明です。私はCD34陽性細胞を肝発がんの前駆細胞と考え、以上の解析から発がん機構の解明を目指す所存です。皆様には今後ともご指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

PBL (Problem Based Learning) はカナダで始められた問題解決型授業で、学生にシナリオという形で課題を出し、その課題を学生間での討論および自主学習によって学んでいくものです。講義形式をとらず、教員は答えを与えるのではなく、アドバイスする形をとります。本ベストシナリオ賞はこのPBLで使用するシナリオをPBLの時間を利用して、学生自ら作成したの中から選考していただきます。審査の観点は、シナリオの完成度、シナリオのアイデア性、そして教材として適切かどうかです。従来の投票では、順位付けをせずに行っていましたが、三番目の候補が同点になる

ことが多いため、本年度は上位三名の選択と順位づけをし、左記の三名に決定しました。

白谷真理さん

「慢性疲労症候群」

古家季穂さん

「ドクターヘリ」

佐々木滉さん

「iPS細胞」

三名のシナリオ内容は、疾患、医療、基礎分野を素材にした多彩なものとなりました。いずれも、自主性をもって調査、完成したところが何え、今後PBLシナリオとして採用を予定しております。



第149回

# 弘前医学会例会

弘前医学会庶務幹事 中澤 満  
(眼科学講座 教授)

第四百四十九回弘前医学会例会が平成二十四年一月二十七日に医学部コミュニケーションセンターにて開催され、一般演題および第十六回医学部学術賞受賞記念講演の発表が行われた。

一般演題は十七題で、A、Bの二会場に分かれて、A会場では主として臨床医学的な研究報告や東日本大震災後の医療支援に関する発表内容、B会場では主として基礎医学的な研究と臨床医学的な研究内容が発表された。今回はA、B両会場合わせて百四名という多数の参加者があり各演題発表後の質疑応答も活発に行われた。一般演題の終了後に、今回の例会一般演題から優秀発表賞を決定する選考委員会が各会場の座長を中心に開催され、A会場での演題からは大和田真玄先生(救急・災害医学講座)の「弘前大学の『一時立ち入りプロジェクト』派遣協力について」の報告、またB会場での演題からは浅野クリスナ先生(感染生体防御学講座)の「Interaction of *Listeria monocytogenes* autolysin amidase with glycosaminoglycans promotes listerial adhesion to mouse hepatocytes」がそれぞれ選出された。引き続き、弘前医学会優秀発表賞授賞式が行われ、各会場の選考委員長から受賞者発表と選考経過報告が行われ、佐藤敬医学研究科長・弘前医学会会長より授与さ

れた。選考対象となった十七題の一般演題はいずれもレベルの高いもので難渋の選考となったが、大和田先生は東日本大震災の復興活動において弘前大学が果たした成果を詳細に報告されたこと、浅野先生の発表はリステリアと肝細胞との連関に関する独創性の高い研究であることが評価された。

さらに今回の例会では、北東北がんプロフェッショナル養成プラン主催のシンポジウムが「がん登録とがん対策 ―青森県のがん死亡減少を目指して―」と題して行われた。青森県が高齢がんによる死亡率が高いのに関し、解析とがん登録の必要性が中野重之教授(社会医学講座)から「がん登録の充実による青森県の平均寿命延伸を目指して」と題して報告され、次いで松坂方士先生(医学医療情報学講座)からがん登録の活用についての具体例が「がん登録の活用による効果的ながん予防・がん対策を目指して」というタイトルにて報告された。会場からは品川信良名誉教授からかつて産婦死亡原因に出血が多かった事実を弘前大学の研究により明らかにして時の政府に予防政策を施行させることができた事例が紹介され、本研究の推進が奨励された。

その後、第十六回医学部学術賞記念講演が行われ、学術特別賞および学術奨励賞の受賞者が講演を行った。学術特別賞は、浅野研一郎先生(脳神経外科)による「悪性グリオーマ治療成績向上のための多角的治療戦略の構築について」、および丹治邦和先生(脳神経病理学講座)による「神経変性疾患における異常タンパク質の凝集機序の解明」の二題であり、学術奨励賞は、三浦卓也先生(青森市民病院外科、消化器外科科学講座)による「Sustained repression and translocation of Ntcp and expression of Mmp4 for cholestasis after rat 90% partial hepatectomy」および鈴木一広先生(三沢市立病院、消化器血液内科学講座)による「Mesenchymal Stromal Cells Promote Tumor Growth Through

The Enhancement of Neovascularization」の二題であった。受賞された四名の発表は、医学研究科における若手研究の牽引役として大いに期待される感銘深い内容であった。なお、今回の例会ならびに学術賞記念講演は佐藤敬医学研究科長・弘前医学会会長の下での最後の開催となるため、長年の功績に対して弘前医学会から佐藤学会長に花束が贈呈された。

今後の弘前医学会は、第九十六回総会が南黒医師会の下で平成二十四年六月十六日(土)黒石市グリーンパレス松安閣にて、第百五十回例会が平成二十五年一月二十五日(金)弘前大学医学部コミュニケーションセンターにて開催が予定されている。

東日本大震災に伴って発生した福島第一原発事故は、周辺地域に甚大な放射線被害をもたらしました。特に福島第一原発から二十km圏内(二市六町二村)は「警戒区域」に設定され、一般市民の立入りが制限されています。平成二十三年五月下旬から、警戒区域内に居住していた住民が一時帰宅をする、一時立ち入りプロジェクト」が行われました。弘前大学は、文部科学省から医療班としての協力要請を受け、教官、医師、看護師、事務員を一つのチームとして、十一チーム

## 弘前医学会優秀発表賞を受賞して

救急・災害医学講座 助教 大和田 真玄

延べ二百二人の派遣を行いました。現地で我々は、警戒区域内に出発する住民の問診に始まり、帰宅を終了した住民のスクリーニングまで担当しました。夏期にも関わらず防護服が必要ということもあり、小さなトラブルはありましたが、全体としては問題なく終える事が出来ました。その成果および現地での様子を報告させて頂いたのが今回の演題になります。他の発表者の方々の優れた研究発表や症例報告を差し置いて受賞したことに、ただ恐縮するばかりです。

## 弘前医学会優秀発表賞を受賞して

感染生体防御学講座 助教 浅野 クリスナ

この度は、伝統ある弘前医学会の第四百四十九回例会で優秀発表賞を頂き、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。私はタイ国の出身で、二〇〇六年より感染生体防御学講座で非常勤研究員として御世話になり、二〇一〇年十月に助教として採用していただきました。この間、グラム陽性桿菌のリステリアが持つ autolysin amidase (A m i) の機能解析を研究テーマとしてきました。

この中で、我々は、A m i が adhesin の一つとしてリステリアの宿主細胞への接着に関わることを見出し、その分子機構については不明でした。今回の演題「Interaction of *Listeria monocytogenes* autolysin amidase with glycosaminoglycans promotes listerial adhesion to mouse hepatocyte」で発表させていただいた研究では、分子機構として 1) A m i を介したリステリアの肝細胞株への接着には四つの C 末端細胞壁アンカードメ...

## 第1回 弘前大学学術特別賞(遠藤賞)を受賞して

脳神経病理学講座 准教授 森 文秋

結果は、adhesin を標的としたリステリア感染防御の研究を更に進めるにあたって有用であると考えられました。本研究は、多くの方々の御指導、御協力により行うことが出来ました。中根明夫先生、並びに研究室員の皆様、糖鎖工学講座の皆様、深く感謝申し上げます。

あることがわかって参りました。パーキンソン病では「 $\alpha$ シヌクレイン」、筋萎縮性側索硬化症では「TDP43」という蛋白質が異常な修飾を受け、神経細胞内に蓄積します。このような異常蛋白質の集合物を「封入体」と呼んでいます。今回の七編の論文では、これら「封入体」の形成過程とそれに関連して生じる複数の蛋白質(チロシン水酸化酵素、シスタチンCなど)の変動を明らかにしました。遠藤賞に採択されたことだけでも大変な栄誉で感激しましたが、東京芸術大学長の宮田亮平先生が製作されたトロフィー(シュプリングエン)をいただきました。誠に感謝しております。それは、この像を観るたびに、なぜか気持ちが悪くなるからです(この像は波間から飛躍するイルカをモチーフにしているからです)。そして、不思議なこと、この像をいただいたから投稿した二編の論文は二編とも受理されました(このうちの二編は半年間で三誌に却下されていたのです)。



遠藤賞シュプリングエン

# 留学だより

麻酔科学教室 助教 丹羽英智



寒波の中パブにて

この度、二〇一〇年十月一日〜二〇一一年九月三十日の期間、英国での留学の機会を頂きました。留学の地はLeicester cityという首都Londonから特急で一時間程の場所にある町のUniversity of Leicester Royal Infirmary Hospitalでした。Leicester大学は英国でトップ5に入るほどの学術的にも素晴らしい大学であり、古くから当教室と交流を持ち、廣田教授をはじめ多くの先輩達が留学を経験していました。今回、私はHonorary fellowとして上記の一年間、基礎医学

研究に従事して参りました。研究内容は耐性を生じない新しい麻薬の研究でした。通常、モルヒネを代表とする麻薬（オピオイド）は反復投与を行うことでその鎮痛作用が減弱します。これをオピオイドの耐性と言います。臨床の場では主に癌性疼痛に対しオピオイドを連日投与する際に問題になります。耐性が生じることにより、そのことで患者様はオピオイドの持つ不快な副作用（吐気、便秘など）に苦しむこととなります。私を指導して下さいましたLambert教授の研究室では上述の

耐性の生じない新しいオピオイドに関する基礎薬理実験を行いました。私はいくつかの細胞を用いた実験からラットを用いた実験まで担当しました。留学前は主に病態薬理学教室の古川准教授と基礎実験を行っている

たこともあり、実験手技に関しては言葉が良く分からなくても対応することができましたが、異文化での生活に適應することは非常に大変でした。四歳と一歳の娘達は現地の幼稚園に通いましたが最初はよく高熱を出したりしました。ただ子供はすぐに適應し、妻と共に英国ライフを満喫していました。そのような家族を見て随分救われたような気がしました。一方、私は日本が好き（しかもどちらかと言えば都会より田舎が好き）で、休日でも外出しない家で居ることが好きなタイプなので、当然外国の生活に適應することができませんでした。それでも自分なりに色々苦勞しながらやってきました。正直、価値観や自分の仕事に対する考え方は変わりましたが、自分の国、日本の素晴らしさを再確認しました。東日本大震災の悲惨な光景を見て、その愛国心のような気持ちは一層高まり、帰国して自分出来る限りのことをしたいと思うようになりました。今、帰国して四カ月が経ちますが、大切なことは、留学すること、そのものではなく、留学という貴重な経験を生かす、帰国後、何を弘前大学や教室にもたらすことができるのか、だと思っ

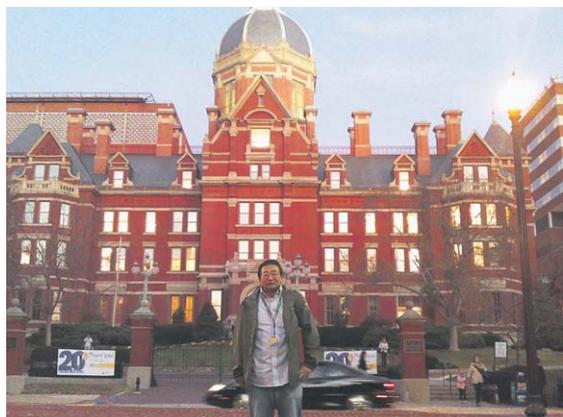
# 留学だより

産科婦人科 助教 二神真行



このたび米国国のJohns Hopkins大学に留学し、婦人科病理学講座で一年間卵巣癌の基礎的研究をしてまいりました。留学について報告する機会を与えていた

少しもお役に立てるよう頑張りたいと思っています。最後にになりましたが、このような貴重な機会を与えて下さった弘前大学及び麻酔科学教室の皆さまに感謝を申し上げます。ありがとうございました。



Johns Hopkins大学は、一八七六年に設立以来ノーベル賞受賞者も十六人いる大学で、附属病院は二十一年連続全米ランキングの一位を維持しています。私の在籍したラボは、婦人科病理学のDr.Shinのラボでした。驚く事に、婦人科病理学講座だけで、六十人以上在籍し、病理学全体（その他消化器、泌尿器、血液、循環器など多数の病理のラボあり！）だと何人所属しているか見当もつきません。主任教授はDr. Kumanaという方で、High Gradeの漿液性卵巣癌の卵管起源説を提唱しています。Dr.Shinのラボは、教授一、助教一、ポスドク八のラボでした。教授のDr.Shinと助教のDr.Wangは夫婦で、主にDr.Wangのもとで分子生物学の基礎を学び、研究を一年間にわたって行いました。

私の留学先は、米国メリーランド州のJohns Hopkins大学です。癌研究で有名な病院で、米国東海岸のボルチモアにあります。ボルチモアといっても、なじみがないかもしれませんが、有名な町です。例えばベールブラスの生まれた町であること、鉄人カール・リプケンが活躍したMLBのオリオールズの本拠地です。同球団には巨人の上原が在籍しましたが、今年はずっとソフドバンクの和田が在籍します。

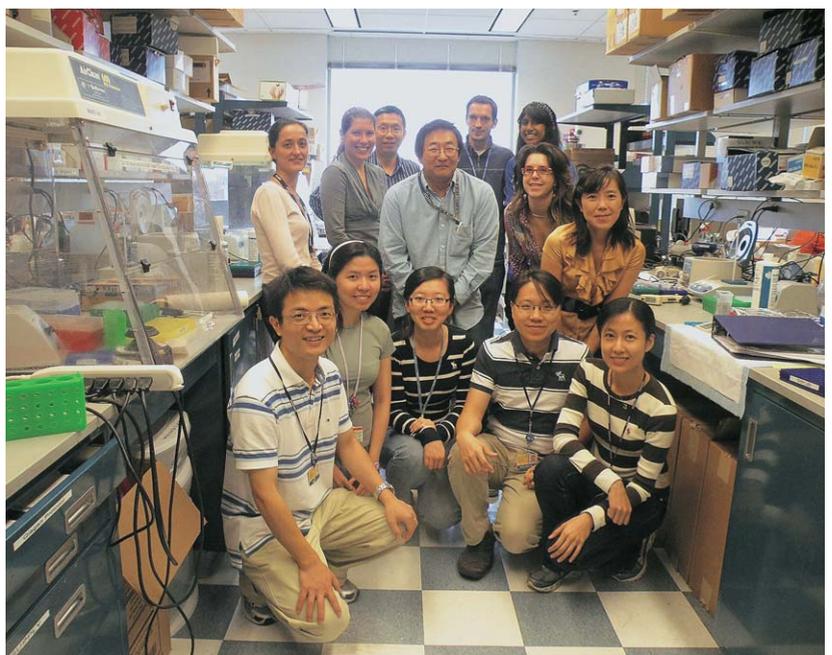
その研究ですが、卵巣漿液性癌の予後因子となるReg1という遺伝子についての検討を行いました。予後との関連を臨床検体を用いて免疫染色して判定し、培養卵巣癌細胞を用いてウエスタンブロットでの蛋白発現、siRNAによるトランスフェクションによる遺伝子導入を行い、ある一定の結果がでたところで帰国した次第です。今後も同様の検討を行いたいと考えています。また子宮内膜症と癌化に関する研究を、私を含め共同で行っており、三大学とともに検討しています。この結果は来年中に論文として発表することができそうです。留学した成果を

## コラム 医学部 之ぼれ話

厚生労働省によると研修医一年目の年収は、百八十万から九百六十万、平均四百三十五万。大病院は全国おしなべて三百万前後、臨床研修病院は四百五十万前後。県別ではなんと青森県五百九十万で最も高いとのこと。研修医獲得のための方策がもしないが、初期、後期研修時期はつ

今後の臨床の糧にして、日々精進していきたいと思っております。最後に留学を支援してくれた親、親戚、心配してくれた兄弟、友人、ほくを信じてついてきてくれた妻、子供に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

なぜとめておけてもその後の青森を支える医師養成のために有効に働いているのか？自分で自分の首をしめてないか？大病院が全国でほぼ一定であるのなら、初期研修の給料は全国一律とまで行かなくとも、少なくとも上限なり目安があってもいいのでは？研修なのだから。



# 渡り廊下(臨床研究棟—外来診療棟)並びに医学部環境整備完成

施設環境部長 上野 泰弘

平成二十三年十二月二十六日に附属病院外来診療棟と医学研究科臨床研究棟を結ぶ念願の「渡り廊下」が約五ヶ月にわたる工事を経て完成しました。翌二十七日には渡り初め式が行われ、遠藤学長、佐藤医学研究科長、對馬保健学研究所長、花田附属病院院長、江羅理事(財務・施設担当)によるテープカットの後、関係者による渡り初めが行われました。

今回の渡り廊下整備は、医学研究科と附属病院は密接なものであり、昼夜問わず往来が頻繁であることから、花田病院院長より計画が提案され、病院長のリーダーシップにより病院収入経費にて実施されました。工事内容としては、既存



外観 1



外観 2



アーケード

仮設渡り廊下(約百九十九平方メートル)を解体し、新たに臨床研究棟と外来診療棟正面玄関を結ぶ渡り廊下(約九十九平方メートル)を新築しました。これまでも、屋外に出ることなく医学研究科と病棟の往来はできましたが、臨床講義棟を経由して、エネセン↓病棟↓中診・外来へと長い距離を歩くことになり、緊急時の対応としては大変不便でした。また、以前の仮設渡り廊下では臨床研究棟地下一階と外来診療棟地下一階西側通用口並びに一階正面玄関を結んでいましたが、屋根のみであったため風雨や雪に晒され、正面玄関の往来には鉄骨階段を昇降することになり、冬季の利用はできない状況でした。



内観 1



内観 2

今回の整備では、臨床研究棟一階と外来診療棟一階正面玄関を結ぶことで、階段を利用することなくスムーズに通行できるようになりました。なお、他の渡り廊下と異なり、外来診療棟側は屋内への接続ではありませんが、渡り廊下出入口には風除けパネルと融雪

マットを設置し、正面玄関までの屋外にはアーケード及びロードヒーティングを新設し、悪天候時の通行に配慮しました。渡り廊下の外観については、周囲と同系の色合いで一体感のある景観とし、内観については、ベージュ系を基調に落ち着いた暖かみのあるものとなりました。機能面については、内部床を防滑性で凸凹が無く歩きにくいシート、腰壁には車椅子等の衝突による衝撃から壁を保護するシートを貼り付けています。天井照明は、省エネの観点からLEDを採用し、スイッチは人感と明るさの併用によるセンサーで、自動点灯及び消灯ができるものにしていきます。その他外来側の自動ドアに電気錠と非接触式カードリーダーを設置し、ICカードで通行するよう防犯措置を施しています。また、医学研究科環境整備として昨年に引き続き在府町西側の囲障改修(約一

## 人事異動

● 大学院医学研究科  
臨床検査医学講座 准教授 杉本 一博  
辞職(23・12・11)  
(勸太田総合病院附属太田西ノ内病院)

腫瘍内科学講座 教授 西條 康夫  
辞職(23・12・31)  
(新潟大学 教授)

形成外科 講師 横井 克憲  
配置換(24・1・16)  
形成外科 講師 村上 誠  
辞職(24・1・31)  
脳血管病態学講座 教授 佐藤 敬  
(学長就任)

感染生体防御学講座 教授 中根 明夫  
(理事(教育担当) 就任)

● 附属病院  
採用(23・12・1)  
循環器内科、呼吸器内科、腎臓内科 助教 齋藤 新(むつ総合病院)

泌尿器科 助教 岡本亜希子  
(勸鷹揚郷腎研究所 弘前病院)  
辞職(23・12・31)  
小児科 助教 藤田 浩史  
(国立病院機構青森病院)

## 社団法人 青森医学振興会

沿革 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鵬校医学振興会発足(任意団体)  
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立許可(青森県)

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようとする事業を行っております。

○ 医学教育の助成	教育活動を活性化するための支援
○ 医学研究の助成	研究活動を高度化するための支援
○ 地域医療振興事業の助成	地域医療に貢献するための支援
○ 医学国際交流の助成	国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。  
会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名	社団法人 青森医学振興会
口座	青森銀行 弘前支店 普通 1087485 ※ 各銀行の本支店及びみちのく銀行 大学病院前支店 普通 0198579 ゆうちょ銀行から振込む場合は、手数料無料です。 ゆうちょ銀行振替(旧郵便振替) 02200-4-57580
会費	医学部教員 1万円 医学部卒業生 2万円 賛同する個人 1万円 賛同する団体 10万円

お問い合わせ TEL:0172(33)5111内線6519 E-mail:jm6519@cc.hirosaki-u.ac.jp

配置換(24・1・1)  
呼吸器外科、心臓血管外科 助教 渡辺 健一  
(高度救命救急センター 助教)

採用(24・1・16)  
泌尿器科 助教 今井 篤  
(大館市立総合病院)

配置換(24・1・16)  
消化器内科、血液内科、膠原病内科 講師 山形 和史  
(消化器血液内科学講座)

配置換(24・1・1)  
消化器内科、血液内科、膠原病内科 助教 櫻庭 裕丈  
(消化器血液内科学講座)

採用(24・2・16)  
形成外科 助手 植熊 有子(医員)

### 弘前大学後援会のご案内

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

会長 石戸谷 忻一  
なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部総務課広報・支援グループ(Tel:0172-39-3012、E-mail:jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp)までご連絡いただくか、弘前大学後援会ホームページ(<http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html>)をご覧ください。

一月三十一日で遠藤学長が退任され、佐藤敬医学研究科長は新学長になられるのに伴い研究科長を退任された。また、花田附属病院院長も三月末で退任される。よって平成二十四年度は、佐藤敬新学長、中路新医学研究科長、藤新病院院長でスタートすることとなった。また、元村教授、兼子教授、須田教授、羽田教授も三月末で定年退職されるため、腫瘍内科学(西條教授の転任による)、脳血管病態学、病態薬理学、内分泌代謝内科学、神経精神医学、医学情報学の各講座も、新任の教授が今年選出される。つまり、平成二十四年度は大変大きな進歩に繋がればと願っている。超過勤務問題も、外部評価委員会の結論が提示されたことで、痛みを伴うであろうが附属病院も立ち止まっているわけにはいかず、藤新病院院長のもと前進しなければならぬ。退任される先生方皆さんが、弘前大学医学部及び附属病院発展のために御尽力されてきたので、残った者として更なる発展を目指して頑張らなければ申し訳ないと思っている。

さて、卒業式、これに続く入学式は、日本では春に行われるのが慣例である。春と言えは桜であるが、桜は日本人の精神的象徴と言われている。葉からの光合成無くして木の中に秘めた生命力をフルに使って美しく花を咲かせ、咲いた後は潔く散る姿に、日本人は共感するのかもしれない。しかし、文部科学省は国際化に向けて、秋季入学を推進したいらしい。これに応じようとして、本邦の最高位にある東京大学が秋季入学への移行を検討するとの発表が一月二十三日にニュースで報道された。明治維新後の帝国大学の入学は、教育システムを、英国をはじめとした欧州から導入したため、当初は九月であった。しかし、政府年度会計が四月から新年度になるため、政府が小学校の四月入学を推奨し、明治十九年に高等師範学校の四月入学を皮切りに、明治二十一年に全国の師範学校、明治三十三年に小学校が正式に四月入学となった。帝国大学や旧制高校は九月入学を維持していたが、大正八年旧制高校が四月入学となり、ついには大正十年に帝国大学も四月入学となった(暮らしの歳時記、三浦康子著を引用)。確かに、入学時期を明治維新後に戻すと言え、それだけのこともかもしれない。しかし、そこで想像して頂きたい。秋といえば紅葉であり、桜と同様に日本人の美意識に強く訴えかけるものである。美しい、潔く散るが、何故か寂寥感が漂う。恐らく、散った後、木には何も残らず、寒く暗い冬に移行するからであろう。秋風素漠とはよく言ったものである。一方桜は、散った後に葉を茂らせ明るい新緑の夏に移行する。つまり再生を連想させる。国際化は確かに大事ではあるが、ある意味日本人のアイデンティティーにかかわる事を簡単に変えるには、それ相応の議論が必要であろうと私は思う。

今回の弘前大学の大変動は、運良く春に起こる。つまりは再生を意味し、より良い発展に繋がると私は確信している。(廣田 記)

## 編集後記

一月三十一日で遠藤学長が退任され、佐藤敬医学研究科長は新学長になられるのに伴い研究科長を退任された。また、花田附属病院院長も三月末で退任される。よって平成二十四年度は、佐藤敬新学長、中路新医学研究科長、藤新病院院長でスタートすることとなった。また、元村教授、兼子教授、須田教授、羽田教授も三月末で定年退職されるため、腫瘍内科学(西條教授の転任による)、脳血管病態学、病態薬理学、内分泌代謝内科学、神経精神医学、医学情報学の各講座も、新任の教授が今年選出される。つまり、平成二十四年度は大変大きな進歩に繋がればと願っている。超過勤務問題も、外部評価委員会の結論が提示されたことで、痛みを伴うであろうが附属病院も立ち止まっているわけにはいかず、藤新病院院長のもと前進しなければならぬ。退任される先生方皆さんが、弘前大学医学部及び附属病院発展のために御尽力されてきたので、残った者として更なる発展を目指して頑張らなければ申し訳ないと思っている。